

住十色
民色

小島 武蔵さん（東葛西在住）
大正15年、下今井生まれ。昭和14年に瑞江尋常高等小学校を卒業後、家業の投網船「あみ武」を手伝うようになる。昭和39年、独立して二之江に「あみ武」を創業。昭和57年、東葛西に移転。平成2年に長男の智彦さんに道を譲り、現役を退く

投網漁歴50年、陸に上がった今も技術は衰えず

「中川でウナギが獲れるんですよ。一昨年には江戸川競艇場の近くで50kgも獲れた日がありました」

と、ウソのようなホントの話を見せてくれたのは、小島武蔵さん。武蔵さんは屋形船「あみ武」のご隠居です。現役時代は主に細川流投網（「本振り」という体を大きく振るダイナミックな動作で船上から網を打つ）で腕を振っていました。

「私が20歳の頃までは団体客の主催で開く競争網（競技会）が盛んで、兄と一緒によく1等を取ったものです」

漁に出るだけでなく、網作りも行っていました。

「目の粗い網は1～3カ月でできますが、細かいものは3年もかかることがあります」

50年あまりに渡って投網を手にしてきただけに、その技

術は陸に上がったからも衰えず、今では趣味でミニチュアの投網を作っています。小さいながらも実用の投網と同じく精巧なもの。

昭和40年頃からは機械で作った網をつなぎ足して作る「つなぎ網」が広まったため、武蔵さんのように投網を一から作れる人は減っています。「今の若手には網の修理くらいはできても、結くのは難しいでしょう」

昨年春、投網文化の未来に危機感を持った屋形船の若手経営者たちが「江戸投網保存会」を発足させましたが、武蔵さんの長男・智彦さんも会の一員で、江戸川区の後援を得るため区長に働きかけた際に武蔵さんのミニチュア投網を持参したとのこと。江戸の情緒を伝える投網文化の生き残りに、武蔵さんの知識や技術が再び力を発揮することになるのかも知れません。

左は投網を打つ武蔵さん、昭和63年の写真。下は武蔵さんが作ったミニチュアの投網

